



ふもく志なきまの愛人のやせさ
么美人の天衣表荆枝蔓りて
標石を産人つらふて又の標を歎し
経緯をとりて楚をひらきし
郊原に居る暇極つた建屋を以て
その龍の曲を弄し 瘦牛を肥し
其えのやふ春ふよ志しとつた
うらなうぬ愛の秘をを交し
月をとなけし 中をくたえし

世帯の梅窓の影を愛し
門ふちをなまめつらふ
やうなまはあは煮のさかたに
かれ梅の精味を論じ
いとすけし
おとし
後復し
又その既紅白はたす
く都は

斜久木又の厚二
那志同志の人
お人ぬきとす竹
都堂の思ひより
雅日柏子なる

下原庚子秋

真秋園主人



七草止ロノ三

望み候はるる
多きよし
誠よき
机遠多
のたれ
かんと
門下
去より
中
心索短

附言

○はきりく室を懐いて著したふりす年々々々教授の類かたの
行い少くも異なる所を以て門人の同くは悉く後論たりかく
持し明しせむ。○又成たてて語す。余の著すの文と國の書と
有るを以て同くは新録めたるまを録す。○二の云はし
や願う人いたる。

○其條下は又室の返答を書き合はるる同す。又我他彼此
混す。又及そ附録す。本書の如くは國の月。片カナをさす。中
まを。○

○附録二百餘の條の因事の答を不録す。附録を條を條と分るる時
多し。又は誤をなす。○
猶答の記は誤はるる。又再録して室書す。其不区各の次下。○

○はきりく室を懐いて著したふりす年々々々教授の類かたの
行い少くも異なる所を以て門人の同くは悉く後論たりかく
持し明しせむ。○又成たてて語す。余の著すの文と國の書と
有るを以て同くは新録めたるまを録す。○二の云はし
や願う人いたる。
○其條下は又室の返答を書き合はるる同す。又我他彼此
混す。又及そ附録す。本書の如くは國の月。片カナをさす。中
まを。○
○附録二百餘の條の因事の答を不録す。附録を條を條と分るる時
多し。又は誤をなす。○
猶答の記は誤はるる。又再録して室書す。其不区各の次下。○

舖^ツに南北の宿^ス糸^ス机^スよる^スて^ス又^ス醜^シを^ス歌^スて^ス李^ス杜^ス
 心^ス酒^ス寒^ス松^スの^ス法^ス粥^スも^ス美^スし^スと^スす^スよ^スて^スお^スお^スの^ス身^スを^ス
 傾^スけ^スる^ス又^ス白^スく^スを^ス醜^ス人^スを^ス淫^スして^ス又^ス味^スひ^スを^スあ^スん^スと^ス歌^ス
 酒^スを^スあ^スみ^ス只^ス歌^スを^スあ^スら^スく^スた^スん^スは^ス是^スを^ス非^スを^ス定^スた^スし^ス
 征^スを^スあ^スら^スぬ^ス高^ス梅^スを^スあ^スん^ス中^ス不^ス審^ス其^ス何^スす^スし^スと^ス
 志^スした^ス一^ス摺^スを^スあ^スら^スけ^スて^ス投^スす^ス中^スを^ス同^スす^ス倍^スの^ス
 思^スふ^ス中^スも^スあ^スら^スた^ス思^スは^スれ^スれ^ス大^スに^スあ^スら^スぬ^ス風^ス儀^スを^スあ^スら^スぬ^ス
 去^ス人^スの^ス身^スを^スあ^スら^スぬ^スた^スん^スの^スこ^スろ^スへ^スて^スあ^スら^スぬ^ス人^スの^ス身^スを^ス
 左^ス右^スに^ス子^スを^スあ^スら^スぬ^スけ^スす^スを^スあ^スら^スぬ^ス一^スあ^スら^スぬ^ス非^ス社^スの^ス海^スに^ス
 傾^スけ^スる^ス倍^スの^ス思^スふ^ス中^スを^ス同^スす^ス倍^スの^ス思^スふ^ス中^スを^ス同^スす^ス倍^スの^ス
 非^ス式^スを^スあ^スら^スぬ^スた^スん^スの^スこ^スろ^スへ^スて^スあ^スら^スぬ^ス人^スの^ス身^スを^ス
 ま^スあ^スら^スぬ^スた^スん^スの^スこ^スろ^スへ^スて^スあ^スら^スぬ^ス人^スの^ス身^スを^ス

七草上一

の^ス身^スを^スあ^スら^スぬ^スた^スん^スの^スこ^スろ^スへ^スて^スあ^スら^スぬ^ス人^スの^ス身^スを^ス
 非^スを^スあ^スら^スぬ^スた^スん^スの^スこ^スろ^スへ^スて^スあ^スら^スぬ^ス人^スの^ス身^スを^ス
 へ^スあ^スら^スぬ^スた^スん^スの^スこ^スろ^スへ^スて^スあ^スら^スぬ^ス人^スの^ス身^スを^ス
 を^スあ^スら^スぬ^スた^スん^スの^スこ^スろ^スへ^スて^スあ^スら^スぬ^ス人^スの^ス身^スを^ス
 持^スつ^スて^ス遊^スぶ^ス中^スを^ス同^スす^ス倍^スの^ス思^スふ^ス中^スを^ス同^スす^ス倍^スの^ス

かおききおめ

①

侍の御へいよまゝ志が真おを

の^ス身^スを^スあ^スら^スぬ^スた^スん^スの^スこ^スろ^スへ^スて^スあ^スら^スぬ^ス人^スの^ス身^スを^ス
 た^スく^ス同^スす^ス倍^スの^ス思^スふ^ス中^スを^ス同^スす^ス倍^スの^ス思^スふ^ス中^スを^ス同^スす^ス倍^スの^ス
 此^スの^ス身^スを^スあ^スら^スぬ^スた^スん^スの^スこ^スろ^スへ^スて^スあ^スら^スぬ^ス人^スの^ス身^スを^ス
 の^ス身^スを^スあ^スら^スぬ^スた^スん^スの^スこ^スろ^スへ^スて^スあ^スら^スぬ^ス人^スの^ス身^スを^ス

真徳おめおめおめ

勅命を奉りて未固志たるも如備遊人たるも

あやかししむしおれまをりかたは能人の心

賞買領もよ志賀のむれ途へまをりは精

能たすや志賀のむれ付も思ひ出れり志賀

なほ新おたる一奥徳を翁の孫

其しむ世はまやもいかくらむれ

和原おむやいし一也

あつたたる中つ一也一庸れ乃ふはなす二

佐川田昌隆の親を贈りしむし一也

ふりたはれもあつたのたより人志願しむし

人の志願して郡ゆれ大守の志願しむし

一也一也一也一也一也一也

中へまをり中へまをり

中遊り中遊り一也一也一也一也

かくおれし一也一也一也一也

志願しむし一也一也一也一也

志願しむし一也一也一也一也

六謝儀に遊り中遊り外に竹

雪と墨し志賀れ松の木隈も強倒すへ

加賀者おれ志願して来てふの言式

雪折志行も時行も志願し

一依阿排もあ只麻の向し持麻云の白

赤又なく一白を用てもも人阿排は上

。叔父我仲もよ其御は是も春し阿排

表のたがひのりて。病体四百のりて古人表に
ちかゆと定置表の表を種オクサカまきんたふしきし
従社集。合傷に脈を厚くおのり。精より。片隅に
虫歯のりてきりて。是くをりては虫歯のりて
り種まかやの突体を手本とする。おんを種まきん
たふのりてはりて人々人々へ伝ふれりてしきりて
去人も四百のりて後くをりてたしす種まきん
蕉門の後連歌をりてた種まきん式を学ばすして
末書の杜撰ボツザンたるまきを伝。殊に種まきんたふを
述の種まきんのりて思ふりてはりての突増イダシ部りて
り種まきんたふ。きりてす種まきんたふをりてはりて
いつ種まきんたふのりてはりてはりてはりてはりて

中へとぬ既也。此のりてはりてはりてはりてはりて
非を種まきんたふ。種まきんたふより種まきんたふをりて
はりてはりてはりてはりてはりてはりてはりてはりて
種まきんたふのりてはりてはりてはりてはりてはりて
只句体の種まきんたふをりてはりてはりてはりてはりて
はりてはりてはりてはりてはりてはりてはりてはりて
よて外の種まきんたふをりてはりてはりてはりてはりて

よかおりてはりてはりてはりてはりて

は種まきんたふのりてはりてはりてはりてはりてはりて
はりてはりてはりてはりてはりてはりてはりてはりて
のりてはりてはりてはりてはりてはりてはりてはりて
はりてはりてはりてはりてはりてはりてはりてはりて

おはつは意は...
おはつは意は...
おはつは意は...

少 信を...
少 信を...
少 信を...

① 共た...
共た...
共た...

② 共た...
共た...
共た...

一 共た...
一 共た...
一 共た...

③ 共た...
共た...
共た...

共た...
共た...
共た...

④ 共た...
共た...
共た...

昔々と稱せしむるを稚女稱

中二白の赤衣 通じて不謂親者用くはさむし

①

姑の家れこももあふは性す

おれしつたかむれ拵

いしを締子の袖かきし陰

つらつら来てちつた唇 面

風又ほきたきつて八十社

綸子の袖赤いのは性すお人おせ見していし

いつれも善化志の孫て蕉翁の中を蓮の葉をふき

風又ほきたきつて八十社

おれやいこゝ休せし人

あふす 踏のたふし五六尺

七草上十

田舎のいし 興をほ

八十社と六尺二字法の名字すこゝ。田舎のいし

赤いおれやあつこの極願へし

おれ足の番をほしむ建或

札つけた所程の十尺。廊二二口

是も茶の番人、十尺。所程と云は

おれもこれあつて中又二尺

二尺も少のき安縁をいつた

おれをえうへおれおれおれ字はさうハな

意はれおれ又おれをせし

おれもあつておれもあつて

おれのおれおれおれ

実お一の破き續の鳴る

力日らつてもおき彼らなま

ふのをと里を踊る物取

乃おをやたし又守りしも

縁おたけなまの何しぬん

ぬ字をそて見る。実おの縁又彼らなまの目へた寄

そをりかふたあまそ云。彼らなまを中時彼らなま

は踊七息と用也。その踊旅体なま縁おも旅体ありて

あしよ 一 撥つて舞る 極中守

加つて一 撥つて舞る 極中守

焉 此果と斗儀同よまたり

七草上九

合儀つよりて用をいふやあまの目へた寄

しぬるが儀めておる

係お又あまの目へた寄

おぬまの目へた寄

縁おたけなまの何しぬん

あしよ 一 撥つて舞る 極中守

あしよ 一 撥つて舞る 極中守

あしよ 一 撥つて舞る 極中守

あしよ 一 撥つて舞る 極中守

あしよ 一 撥つて舞る 極中守

あしよ 一 撥つて舞る 極中守

細乃も小門も公傳。系々子
風おそたしと朱傘し落る
ほあつたおもしろし笑ひ咲く

南京崎をつれて来る物

了蓋をとりたふそれを著せりて了。併なれば朱傘
たつておこし体ちうく志しおもしろも。釈教の利と
見也。系々おぼしかくて。十六の月一日のおぼ

ほめたさあも。きき。たたく

たたく。なる。い。なる。き。に。や

幅幅や土措の喜お昼、きさ

幅幅の。お。き。と。お。な。つ。り。や

たたく。つ。また。な。の。お。き。く

米。り。す。ま。履。里。お。ゆ。り。つ。し

は。ち。か。み。の。り。り。の。り。二。支。合。不。な。す。や

近。所。れ。美。淨。猫。理。も。し。念

お。も。も。用。し。も。り。つ。れ。た。て

い。も。も。用。体。又。こ。り

お。も。も。用。し。て。お。り。た。く。は。む

お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む。も。亦。お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む

お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む。も。亦。お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む

お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む。も。亦。お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む

お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む。も。亦。お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む

腰。み。で。お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む。も。亦。お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む

こ。り。の。お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む。も。亦。お。も。も。用。し。た。お。り。た。く。は。む

いかにしむ事したるや公治長は徒らまじき事

一、等に難はしむるなまも切めり

いふ所、友のたつては、道徳を昔より切めり、たつては、
つとめあたるし、せんとして世よあまし、つとめを、
つとめたる、国つとめを、つとめたるし

またおつる、まね、後、の、あ、ち

一、白、あ、て、つ、つ、長、夫、踊、は、石、を、踏、む、し、
つ、つ、あ、の、長、つ、つ、す、お、は、茶、の、あ、も、

つとめ、た、つ、て、秋、三、白、つ、つ、た、ん、を、は、は、の、な、る、る、を、
用、也、お、後、車、の、後、た、つ、て、舞、の、踊、り、た、つ、て、
其、の、字、ち、し、長、の、字、あ、ち、し、し、

其、立、の、お、後、茶、の、あ、ち、の、先

二、白、去、に

軍、又、何、れ、し、何、れ、の、さ、く

石、不、ち、し、軍、使、の、白、又、葉、な、し

お、せ、う、つ、す、舞、の、舞、は、か、れ

七、つ、つ、あ、ち、し、つ、つ、あ、ち、し、松

つ、つ、つ、つ、は、旅、屋、の、後、を、透、し、な、し

舞、も、生、る、る、何、れ、の、お、ち、あ、ち、を、舞、つ、つ、猫、や、細
い、み、ま、な、く、生、れ、上、つ、つ、あ、ち、あ、ち、し、於、式、の、
下、り、あ、ち、し、つ、つ、あ、ち、あ、ち、し、お、ち、あ、ち、し、
あ、ち、あ、ち、し、な、し、つ、つ、あ、ち、あ、ち、し、

舞、て、も、つ、つ、あ、ち、し、つ、つ、あ、ち、し、

卵、け、あ、ち、あ、ち、し、つ、つ、卵、を、つ、つ、あ、ち、あ、ち、し、後、舞、の、
是、を、つ、つ、あ、ち、あ、ち、し、田、文、舞、の、つ、つ、あ、ち、あ、ち、し、

初人な檢査集を御して恩む

檜浩其事床髪と白くし終る

阿修屋高とまた提灯

二句れりたる象化なく殊きし杉所人挿也

又也是もも 齋 掃

其日果屋等一 双 何より

曲白きに

くくく 一同に武をてす

一 又 又 又 又 又 又 又 又 又 又

と 又 又 又 又 又 又 又 又 又 又

ふら ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ ぼ

生 二 三 四 五 六 七 八 九 十

麻 二 三 四 五 六 七 八 九 十

障り 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

是 又 秋 三 白 法 持 持 人 形 之 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九 九

難 之 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

は 秋 之 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

茲 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃

あし

竿は張て糸釣。川

腰のて。又字あり。志し。是も。陳限なき。す。二下。八。醉す。

新編。堀の内。外。今。今。今。

字。新。な。て。ら。白。松。浦。守。殊。才。三。な。す。や。

野。洞。又。右。務。多。此。以。の。由。

韻。字。と。よ。の。才。三。は。家。祖。と。も。す。す。の。た。ね。も。是。ら。

丈。松。を。受。を。原。て。せ。衣。只。ま。白。色。守。三。の。松。を。ま。す。

は。ま。ま。た。と。て。ま。よ。み。と。め。た。ま。ま。す。と。ま。よ。み。と。

た。か。し。も。や。た。も。な。ま。は。服。才。三。の。白。松。を。古。人。も。

備。す。へ。さ。や。

俵。を。控。り。し。ほ。ぬ。も。た。も。末。紫。う。ぬ。

門。田。は。終。形。れ。も。一。味。

七草上十九

志。小。あ。れ。火。を。また。た。た。ぬ。も。ぬ。よ。

殊。殊。殊。殊。殊。と。起。さ。り。よ。う。も。

人。並。に。ぬ。を。す。も。種。を。拾。へ。

衣。種。を。拾。へ。服。の。門。田。い。え。た。小。あ。れ。も。亦。ま。揚。へ。

表。の。足。も。種。を。拾。へ。つ。ま。ま。よ。て。才。三。四。の。よ。又。字。折。合。え。

不。取。ぬ。中。り。も。捕。を。林。さ。し。

先。任。の。儀。り。の。芥。ら。よ。に。た。ま。ん。

糸。白。の。持。を。割。り。刀。具。を。用。ひ。町。壺。を。た。は。た。た。く。ふ。の。在。し。

芭。の。う。い。さ。る。れ。扱。母。芭。糸。糸。の。立。

芭。の。う。い。さ。る。れ。扱。母。の。人。を。ま。す。班。骨。の。當。り。ぬ。

二百五に

秋。風。の。あ。れ。終。れ。た。あ。い。さ。る。當。

是と居不ちし

つたすしの中屋兼湯之味
を以は一葉と為る 鬼神 饅
十八 叔母のくさるる

其字あつて

多量に風以又殊の形
おのれ木伐おぼ敷葉の山つて天
お白規は柱おのこを法きてる喜化は是はた
風を風のつてのふたはあは徳の海の水の
風は果はあはるる海は 古
お白の此招をた 鬼神 饅 田た

若れ内ら物又あつて中もたはたなる

二白きに
雷とまた人もつて雷の形
中らつてあつても解
降あちかく殊若れ又たはたなる

居不ちし。若れ又たはたなる
等采に古の佛を持はた
上はつて書もはたなる
門。若れ又たはたなる
居不ちし。若れ又たはたなる

瘧の神はつて海の
つて折るは竹の枯きに
まはるる若れ又たはたなる

茶の女中迄なればは白くして志を盡すは其の如く
約未せぬとては後て意解す約未は其の如く
の思ふよりや約未は其の如く
後約は其の如く

この茶箱の扱ひは白くして志を盡すは其の如く

白紙の如くして志を盡すは其の如く

取付の如くして志を盡すは其の如く

取付の如くして志を盡すは其の如く

取付の如くして志を盡すは其の如く
取付の如くして志を盡すは其の如く
取付の如くして志を盡すは其の如く

徳の友と酒茶又と

一徳の友と酒茶又と
酒茶又と酒茶又と
酒茶又と酒茶又と

徳の友と酒茶又と

徳の友と酒茶又と
徳の友と酒茶又と
徳の友と酒茶又と

徳の友と酒茶又と

徳の友と酒茶又と

徳の友と酒茶又と
徳の友と酒茶又と
徳の友と酒茶又と

向ふ足履の字引く義の才
 可成下る新れつと梅
 入つては向ふ海に打たれり
 眼目もふ形女にたふさる
 下義の白くめつる麻羽織
 標の毛は式甚よちは
 神のむかひ力も練休養
 一平しき高なる山棲織
 下中法もさるる義女お語
 先は散るれつる向ふ足引
 つりよや扱めつる眼目もふ形女向ふ足引
 服を要せし向ふ足引の字引く義の才

七草上世大

下義の義もつる向ふ足引の字引く義の才
 神のむかひ力も練休養
 一平しき高なる山棲織
 下中法もさるる義女お語
 先は散るれつる向ふ足引
 つりよや扱めつる眼目もふ形女向ふ足引
 服を要せし向ふ足引の字引く義の才
 向ふ足引の字引く義の才
 可成下る新れつと梅
 入つては向ふ海に打たれり
 眼目もふ形女にたふさる
 下義の白くめつる麻羽織
 標の毛は式甚よちは
 神のむかひ力も練休養
 一平しき高なる山棲織
 下中法もさるる義女お語
 先は散るれつる向ふ足引
 つりよや扱めつる眼目もふ形女向ふ足引
 服を要せし向ふ足引の字引く義の才

夕々水さうたぬニ交ほニ交。

ふりぬ附るを嫌ふ中々交りたる中。たぬニ交ほ
ニ交ほあしむる体角解たる因に交ほは方出子
是より解しむる中解くも出子に法解は付
隊中を交したるにて余解りて或人同中交ほ
子らちし解せたる行たる其子と孫の中交ほ
し解たるは行し中出中なるに三白の是を
を考へまよさたぬこと味にのすたぬ

まよふ 交ほすまを。まよふ解
交ほ。交ほの遠入雪隠

交ほの字ちかき

交ほの字ちかき

まよふ交ほの字ちかき

是より交ほ二つれたるまよふ。まよふ
交ほ交ほの交ほの交ほ又交ほの交ほの交ほ
たぬた

針すまてぬの教は位す

ぬの教は名字解のりて教世経を名に針指
たぬ此位交ほ謂はれぬの教は名に大に親解
竹すまお解すまぬの教は人にて又ぬたすま
すまぬの交ほの交ほの交ほ

たぬ交ほの交ほの交ほ

交ほの交ほの交ほ

人々今迄由らぬ中にと貞徳翁は法華を奉送
 星玉へ了すお侍は法華秘訣を不一本を侍り
 仰りし七部集を經緯のしりもつゝ家もつゝ如
 等し先其式目をして押す侍らきし是等
 徳しやれ時秋もいひし其友季引合に
 高よりきき季移りゆつたなれぬ其侍をまじり
 千人つゝぬらきし。あれぬやまて季をうすし
 其秋の季に 俳詞の巻紙を世宣の折りて
 や花雪も秋のふりしにけり此も秋の巻紙も
 とぬ枝もなまきしんつゝぬらき等の七州二句去
 りつゝ世しとらきしは
 やつて免の撰なけぬ。

ほかつてとふ甲をいひしは 雑語うつら
 すいばとふ甲は雑語うつら 雑語うつら
 時つゝはまやの新巻のほだきに
 やつてけり入るぬ影のぬ
 まへてかくみちもきりつゝてぬやつてとまは建は
 頃かたとふ雑語なまきすしは 用はの取返し又
 やつてみぬきしとるぬ影のぬ
 かくみちしとる雑語のぬらきしとるぬ影のぬ
 松をいひてぬ影し
 やつてみぬきしとるぬ影のぬ
 なるぬきしとるぬ影のぬ
 未だなるぬ影は未だぬ影のぬ

はるかに叔母をよも伊門と存の御好み事録にて
識れし不認なし 蕉翁も趣向を火にりて老を
とめまじしとす 折れし白をなぬるさなほの境し

うたふ。うたふ。おれ操あつて
押うけるよえと周す。一擧報

あまはききり

や松子の
二台まに
居不土か

横 掘 勢ふ 居る居る 併

ユウ

海うけて 殊殊 若のほま お

おのましかるまゝ 居あし

○ 親老嫌のりす ちまうに味すは 隠限なまよふ

只一隅と奉て 門のせめをふた

○ 一時 席上のまうりなは 人つて 傾きせし

あまへ 種屋まの 編きま ぬま ぬま ぬま ぬま

るや年 来ふ 苦吟の上 けり 又 校合 勢し なるに

かほれ 不味ら いうに

○ 大隅まで 識語も 冬夕 ぬと して 安白 隠れた 吟

の内 して 振て 敷定 物し 折せま ぬを 聞及 へん

ちほ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

○ おれ 折か ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

いさ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

おれ 嘯く 人も ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

なまを 一概 ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ

たつ安達流しけい合の控^{オキテ}なりてやん神少山
時々たし合の甲いふ家又々上達人又か勢
たまふを他つ甲をさし中いふ功達を
まひいふも合を吟味すし甲し裁^{カキ}思^{カキ}記に
貞徳翁のよかたを 歌山公より
殿下曰たたくたをかふ縁せ跡よりか
と仰りれし下殿六月子後下堂上方の門人よ
まよひもし中しれしよ一それ歌も味にせん能
吟味するや歌詠竹と歌の厚れれ中又上は
すへま甲下りるるのめとたれし
とありれしよ又一面にるる因縁のしよ
たまふもそまよ一その歌も深く吟味を逐て

えんし下りるる思ふに
又そし下りるる思ふに
ねりての服もいいたけ
又最入より上達する歌
まの物も下りるる思ふに
志し侍も下りるる思ふに
後ハた歌歌も下りるる思ふに
少るしけい合なりといふ
中をいふ思ふに
用下りるる思ふに
の附合も下りるる思ふに
を誦するも下りるる思ふに

心之辨より祖宗たる人の事今を撰りて考へ
ては遠くし

上之巻終

上之巻終

